

Carefree Cafe



作：土鳩

土鳩

「月島君ってほんとマイペースだよな〜」

もしかしたら

『もっと空気読めよ』って
言われてるのかもしれない。

だからといって僕なのろまな脳みそじゃ
面白い言葉で到底切り返せそうにないので、
「え、そうですか？」とだけ返す。

「うん、なんかご飯食べるときも人よりゆっくりだし、
突然ふらっとどっか行っちゃうしね。」

僕が話しているのはバイトの先輩の須々木さん。
彼女はとても気配り上手で仕事もできる。
現在大学四年生で大手食品会社への内定も決まっている。

バイトが終わり、まかないを二人で食べているときに
「ご飯を食べるのが遅い」なんて話を出すものだから、
僕はむきになっていつもより少し早くご飯を食べようとする。

けれど言い返したい気持ちがあるので
やっぱりそっちを優先する。

「...マイペースというか、ほかの人のペースに合わせる余裕がないんですよ。
最近人に言われて気づいたんですけど、僕って人と話しながら食べると、
しゃべってるときは箸が完全に止まっちゃうらしくて、
食事が中断してしまうんです。」

「あ〜確かにそうかも。

月島君今も手振りを交えて話してたからお箸が遊んでたもんねえ〜。
...私ならそういう場合話し相手が話している間にガツと食べて、
相手が食事をしている間に場をつなぐために話をするかな。」
と話す須々木さんは既に完食している。
僕はそんな須々木さん(他の人も実践しているだろうが)のように器用じゃない。

相手を待たせつつ、けれども僕は話を続ける。

必要以上にあせり続ける。

一度に二つ以上の物事をするのが苦手だ。

この前路上で友人と自転車をこぎながら会話をしているとき、

自分が今ハマっている漫画のストーリーの説明を

どこからしようか考えていると、

正面の植え込みに衝突しそうになった。

といっても一つのことだけやっても

集中しきれているわけではない。

とにかく何をするにも要領が悪い。

たいした特技もなく、

何かに対して努力家ってわけでもない。

他人から「マイペース」と言われる僕は、

結局他人のペースにも、自分のペースにも

あわせられていない。

誰のものでもないペース。

そんなペースに僕は勝手に振り回されている。

バイトからの帰り道。
夜中十時の川沿いのこの道にも慣れたけれど、
さすがに十月ともなると少し肌寒い。

等間隔についている街灯の前を
自転車で横切り続ける。

次の橋で曲がればもう
自分の住むアパートもすぐそこだ。
明日の講義は朝早い。
帰ってさっさと寝てしまおう。

人と会ってもうまく本音が話せない。
本当の自分のペースでいられるのは
自分の部屋くらいだろうか。

でもそこでは自分の気持ちを
吐き出すことはできない。

自分のペースで伝えられる場所がほしい。
自分のペースで伝えられる相手がほしい。

根暗なことを考えるなよ、と自分を戒め
前に向きなおった。
川沿いの見慣れない灯り。
それはある建物から漏れていた。
怪訝に思って僕はその建物に近づく。
居酒屋みたいな外観。
おでんのようなダシのいい香りが漂っている。
ただ店の名前はどこにも書かれていない。

—こんなお店あったかな...

お腹が空いている。
ただそのときの僕はそのことの不自然さに気づかなかった。

何故不自然か？

つい先程バイト先でまかないを腹いっぱい食べてきたからだ。

でも僕は確かにお腹が空いていた。

食べるものを欲していた。

気がつくと僕はその店（と思われる建物）の戸を開けていた。

「へいらっしゃい」

戸を開けたと同時にしゃがれた男の人の声が聞こえた。
確かに飲食店のようだ。

最初に目に入ったのはカウンターごしの声の主だった。
あごひげのある角ばった精悍な顔立ち。
がっしりとした体格のおっちゃんだ。

「一名様で？ こちらのカウンター席にどうぞ！」

言われるがままに席に着く。
見渡してみると座敷やテーブル席もある。
外で見るより少し広く感じるが、
いたって普通の居酒屋のように見える。
ただ、ほかのお客さんは見られない。
バイトと思われる
僕と同じくらいの歳の青年が
水を出してくれた。

「ご注文は？」

その質問に僕はあわてる。
お品書きを渡されず、突然聞かれた。
あたりを見回してもメニュー表がどこにも見られない。

「あ、メニューってありますか？」

「ないです。」

「え？じゃあどうやって頼めばいいんですか？」

理不尽なバイト君の返答に僕が焦っている所に、
カウンター奥のおっちゃんが話しかけてくる。

「お客さん、この店に入ってくる時どんなにおいがしました？」

「え？えっと...おでんのにおい...だったと思います。」

「じゃあおでんだな！かしこまりました！」

とおっちゃんは早速おでんの準備を始める。

居酒屋におでんというのも少し違和感を感じたが、
奥の調理場には確かにおでんの入ったダシ入れがあった。

ちょっと不思議な店だな、と思ったものの
そのときの僕はあまり深く考える余裕がなかった。
たださえバイト帰りなのに加えて腹ペコである。
いつもよりひどい疲労感が全身を襲う。

おでんのダシのにおいがする。

意識が朦朧がしてきた。

早くおでんをいただいて帰ろう...

早く食べたい...

ああ明日の講義ってレポートなかったよな...

眠い...

「マスター、新しいお客さんだよ。」

この声で意識を取り戻した僕はドアのノブを持って立っていた。

僕の視線の先には...

リスを抱いた熊が座っていた。

絵本のようだ。

さっきまで僕がいたはずの居酒屋とこうって変わって、
そこは洋風の喫茶店のような部屋だった。

大事に手入れされていそうな
光沢のある木製のカウンターや椅子。
いわゆるアンティーク調の家具。

カウンター奥にある食器棚にも
こぎれいなグラスや木製の食器が
整頓して収納されている。

それだけなら、たまにある
ちょっとお洒落な喫茶店である。

ただ、そこにいるヒトは
僕に絵本を連想させる。

カウンター手前に座っている
一人は大柄である。
青いオーバーオール。
指先まで太い手や脚。
白色に近づいたツヤのある頭髪と眉毛。
優しく穏やかなまなざし。

どこか品のある老人のようである。

だがしかし全身がなんとも毛深い。
緩やかに出っ張った鼻先は黒く、
半円型の耳は頭の上、つまり頭髪から二つ覗かせている。

そう、彼は服を着て、髪のを生やした
熊であった。

熊のひざの上に座っているもう一人は
どうやらリスのようだ。

大きい尻尾の生えたりスの女の子。
かわいい少女らしい
明るい赤色の服を着ている。
その僕に向けられた目は
どこか怯えているようにも見える。

非現実ながらも違和感のないような光景に思えた。
本当なら人間のような振る舞いをするような
熊とリスなんて、恐ろしい光景であろう。

だけど目の前の彼らは
安心させるような姿をしている。
絵本にでてくる登場人物のようだった。

登場人物の熊は後ろを振り向き
再び同じ言葉を繰り返す。

「おおい、マスター、新しいお客さんだよ」

カウンターごしには誰もいない。
奥にも部屋があるようだが、
僕が立っている場所からはその様子は見えない。

僕はお客さんなのだろうか。

僕は開いたドアのノブをつかんで立っている。
もしこの光景が絵本の一ページで
僕ではない違う誰かが読者だったとしたら
丁度喫茶店に来訪者が入り口から入ってくる
シーンとして描かれているのだろう。

だとしたら、新たな登場人物の僕が
次にとるべき行動はなんなのだろう。

マスターが現れるのをその場で立って待つか、
どこか空いている席(つまり熊とリスの座っている席以外)に
とりあえず座ればいいのか。

店の中に入り、ドアを閉めることは
間違いではないと判断して、
僕は後ろを振り返らずにその行為を実行した。

こんなヘンテコな状況でも、
僕は誰か、何かのペースに合わせてようとする。
そこにはいないはずの何かに。

それは決して自分のペースではない気がする。

「まあこっちに来て座ったらどうかね。」

熊が僕に言い、彼の隣のカウンター席を指した。

次にすべきことを考えていた僕は
喜んで彼の言うことに従う。

熊の膝の上のリスは相変わらず
僕のことを警戒している。
警戒すべきは僕のほうのはずなのに。

歩き出してふと気づいた。
自分の着ている服装が違う。
いや、服装だけではない。

手が茶色い毛に覆われている。

まさかと思いその手で顔に触れる。
口と鼻が異様に出っ張り、
鼻先がやたら湿っている。

「ウソだ...」

「まあ、落ち着きなさい。
そりゃあ誰だって慌てるじゃろう、
突然自分が犬人間になってしまえばのう。
ほれ、ツリー、
鏡をあのお兄ちゃんに貸しておやりなさい。」

熊の言葉を
聞いて確信し、
しぶしぶリスに手渡された鏡で自分を
見て確認した。

「顔が、体が、犬になってる...！」

「...まあまずは座って話をしようじゃないか。
あわてることはない、
時間はゆっくり流れるようじゃなあ、
こちらでは。」

リスを僕と反対側の席に座らせて、
熊はカウンターの奥へと入りグラスを持ってきた。

カウンターの上にあったポットから水を注いでくれる。
「どうぞ」

「あ、ありがとうございます...」

何から質問すれば良いのだろう。
ただでさえ初対面の人と話を切り出すのは苦手である。

「さて、自己紹介がまだなんじゃが...」

ああそうか。まずはそれだな。

「君、名前を名乗ってはならんぞ。」

...僕は何をすればいいんだ・と思いつつ
とりあえず水を飲んでみた。

「...正確には自分の本名を言ってはいけない...らしいんじゃ。」
そう熊のおじいさんは言い直した。

「ここでは自分の名前を自分でつけておいて、
みんなそれぞれその替わりの名前を呼び合う。
それ以外は気軽にくつろげればいいんじゃないかのう。

わしはここではウェンという名前にしておる。
よろしくな。」

熊のおじいさん...ウェンさんはカウンター越しに
僕に握手を求めた。

「あ...よろしくお願いします」と僕はそれに応えて握手をする。

「ツリー、君も自分で挨拶ができるね？」
ウェンさんはそうって僕の二つ隣の席に座る
リスの少女に挨拶を促す。

それでも、彼女は挨拶どころか
僕に目を合わせようともしない。

「ツリー、わたちはおそらく似た理由で
ここへ望んで来ているんだ。
ここでは君のやりたいようにすればいい。
だが最低限のモラルとマナーは
わしは守るべきじゃと思うぞ。

誰も君の紹介で不快に思う者はいないじゃろうし、
いても放っておけばよいではないか。」

彼女の決断には少しの時間を要した。

でも、その時間は僕にとっても必要であった。
自分のここでの名前を考えなければとっていたし、

紹介のあとですべき質問、僕が知るべきことは何か
考える必要もあると思っていたからだ。

僕が自分の名前と具体的な質問を二つほど思いついたときに
リスの少女が口を開く。

「...わ、わたしの名前は...ツリー...です...
ごさいです...
よろしくお願いま...」

ツリーという名前はウェンさんが何度も連呼していたし、
言葉の最後は小さすぎて聞きとれなかったが、
彼女が五歳だという事実はわかったし、
なにより幼いころから人見知りな僕には
彼女にとって勇気の要る自己紹介だということが共感できた。

「こちらこそよろしく。」

僕は精一杯の笑顔を彼女に返す。
ツリーは顔を赤らめて目をそらす。

「次は僕の番ですよ。」

たった二人相手に自己紹介するだけなのに
かなり緊張している。
一呼吸してから僕はその場を立ち上がる。

「ええと...僕のことは『ムーン』と呼んでください。
二十一歳です。人見知りは激しいほうですが
仲良くしてやってください。
よろしくお願ひします。」

そうやって僕は二人にお辞儀をして、
ツリーに握手の手を差し伸べた。

彼女が戸惑いながらも僕の手を握り返してくれたのに

心からほっとした。

お互いの自己紹介は終わった。

といっても名前と年齢ぐらいしか
教えあってはいない。

しかもその名前も自分が考えただけで
これまで自分が呼ばれていたものではない。

それ以外に何を紹介して良かったのか。

本当の名前を言うてはいけないのならば
きっと自分がどこに住んでいて、何をしている
人間なのかも言うてはならないのかもしれない。

その事実に対してうっすらと言いようのない
不安を感じながらも、僕はウェンさんに
さっき思いついた質問をした。

「僕はたくさん質問をすべきなのかもしれないんですが...
まず思いついたことから順に訊かせていただきます。

ここはどこで、何故僕はここにいるのでしょうか？」

ウェンさんはゆっくりと、時間をかけて
僕の質問に答えてくれた。

不思議と僕にとってはそのウェンさんの対応が
心地よいものを感じた。

ここでは焦ることはないのだという雰囲気
僕を安心させる。

「ここはワシや君やツリーが望んでいた場所。

何故ここを望むのかは人によって違うかもしれんがのう。

君やワシらが日々『人間の』姿で住んでいる場所とは
違った場所のようじゃ。

だが君を始めここにいる者はみな自分から
『この店の』ドアを開けてここに入店してきた。

そして同様に店を出ることだって可能なんじゃよ。」

「店を出る、ということは、元の場所に戻れるということですか？」

この質問をした瞬間、僕は自分がここに来る直前に
居酒屋で注文したおでんを待っていたことを
唐突に思い出した。

自分の言う「元の場所」を頭の中で
探し続けた結果である。

僕が自分であけたのは
あの居酒屋の入り口だけだな、と
思い返していると、
ウェンさんが引き続き質問の答を返してくれた。

「元の場所にはいずれは帰ることになるじゃろう。
ただこの店では『店を出る』のと『店から外出する』ことは
別の意味を表す。

最初はややこしいかもしれんが、ツリーも覚えたことじゃ。
すぐに慣れる違いじゃろう。

『店を出る』ことは君の言う『元の場所に戻る』こと。
もちろん『店を出た』後は君は犬ではなくなるし、
もとの生活をいつも通り続けることになる。

『店から外出する』ことはこの店の入り口から

物理的に外に出ること。

君が再びドアに手をかけ外にできれば、
そこの窓から覗いて見える景色と同じ場所に
『外出する』ことができる。」

ウェンさんが指し示した入り口の横にある窓から、
明るい外の様子が見える。
そこからは向かいの建物のレンガの壁が見える。
間に道路をはさんでいるようだ。

そこは明らかに僕の住んでいた町並みとは違う、
洋風の町並みであったし、
バイト帰りの夜中でもなかった。

なるほど確かに『店を出る』行為と
『店から外出する』行為は違うのだろう。

じゃあ...

「『店から出る』には何をすればいいのですか？」

ウェンさんは優しく笑う。

「まあその手段は君がどのみち体感することになるじゃろうから
あえて教えんでおこう。
時間の心配はまずせんでよいしの。

それとも君はすぐにでも元の場所に帰りたいのかね？」

ここで僕は気づく。
僕はここにもう少し居たいようである。

あわてることのない、話し相手の居る場所。

ここはきっと僕の望んだ場所なのだ。

ふいに店の奥から高い声が聞こえた。

「おっ、新しいお客さんだねっ」

例に漏れず、人間ではないヒトが店の奥から顔を覗かせた。

どうやら今度は鳥人間...鳩人間のようだ。

「マスター、どこへ行ってたんだい。
一通りここのルールは教えてしまったよ。」

「いや～ゴメンゴメン。
ちょっと買い物に行つててね...」

他の店員もいないのに
客がいるときに店長自らが外出したというのか。
なんとも無用心な話である。

さっきウェンさんが自らカウンター裏まで
入ってグラスを出したことといい、
若干非常識なことがここでは通用するようだ。

「ほんとまだ慣れていなくてね。
ここを開店したのは最近だから。」

「さっきえらそうなことを話したが、
マスターの言うとおりの店は開店して間もなくで、
ワシもツリーもこの店に来るようになって
間もないんじゃ。」

「ウェン爺が最初のお客さん、
嬢ちゃんはその次の日に来始めて
それから四日間ほぼ毎日二人とも来てくれるよ。
そんで今日は兄ちゃんが初来店ってわけだ。

なんか飲むかい？好きなものを頼んでみなよ。」

おそらく居酒屋のときと同じく
メニューはないのだろうと考えた。

このお昼時の洋風の喫茶店に似合うような
コーヒーでも頼もうと思い、
マスターに注文してみる。

「かしこまりました。」そうってマスターは
カウンター奥でコーヒー作りにとりかかってくれる。

「それじゃあツリーとウェンさんも
最近知り合ったばかりなんですね。
その割には孫と祖父みたいに仲が良さそうですが」

気がついたら元の席についたウェンさんの膝の上に
最初のようにツリーがちょこんと乗っていた。

「そうじゃよ。じゃから君もすぐに
ここに馴染むと思うがね。

今日は初日だから君も長居はできんかもしれんが、
少しこの店でゆっくり話でもしていくといいさ。

どうだね、最近なんかいい事あったかい。」

この非現実的な空間で
余りにも日常的な問いかけをされたものだから
少し驚いたが、僕はこの後自分でも不思議なくらい
内面的な悩みを吐露することになる。

これらの熊のおじいさん、リスの少女、鳩の店長、
もしくはこの店の雰囲気自体に対して
僕は知らず知らずのうちに警戒心を解いていたのだろう。

「いいことですか？

特にないですね...

やらなきゃいけないことで

頭がいっぱいいっぱいで。」

「ムーン君は普段何をしているんだい？

仕事をしているのかね？」

ウェンさんが僕に質問をする傍らで、

ツリーも僕を見ていた。

「いえ、大学生です。

バイトをやっているくらいで

仕事にはついてませんよ。」

「大学生かね。

やりたいことがいっぱいできる

時期じゃないか。」

「やりたいこと...ですか。」

いいことややりたいこと。

今までに自分の中に

これらの物事があったかなんて

考えもしたことがなかった。

僕が考え込んでると

ウェンさんは微笑んで話を続ける。

「そんな深く考えることはないさ。

君のやっている勉強の内容や

バイトの社会経験とかだけでなく

今周りで起きるすべてのことが

きっと将来役に立つのだから。」

「そうなんですかね...

ささいな困ったことならよく起きるんですけどね。」

僕はバイト先で須々木さんに
言われたことを思い出し、
そのとき自分で思ったことも含めて
この場で話してみた。

「ははは、自転車乗りながら
植え込みに突っ込んだのは
君がただ単にドジなだけじゃないのか？」

コーヒーを淹れてくれている
マスターが口を挟む。

「いや、確かにドジですけど
他の事やっていると
普段よりさらに集中できなくなるんですって。」

僕がとっさにムキになって
弁明にもならない弁明をすると
みんなが笑った。
ウェンさんも、ツリーも。

「でも君に『マイペース』だと言った
その先輩も悪い意味で言ったのでは
ないのかもしれないぞ。」

「うーん、そうだとしても
僕自身この要領の悪さをあんまり
いいものと思っていないからねえ。」

「案外君のことをうらやましがっているかもよ。」

ウェンさんの一言に驚く。

「ええっ!?

それは絶対ないですって。

あのヒトは僕なんかより

よっぽど要領もいいし、

いろんな所に遊びに行ってるし、

大企業に就職決まっているし...」

言ってる自分で悲しくなってきた。

そんなウェンさんはこう返してくれる。

「君の言うような表向きのことじゃあなくてだ。

君のふるまいや奔放さは

その人になんかものかもしれないのだからな。」

その励みだけでなく、

そういう考え方もあるんだ、ということに

気づかせてもらえたことが

うれしかった。

こんなに自分の悩みを吐き出して、

それに応えてくれた人がいたことは

これまでにあったらどうか。

その後も店内で話は続いた。

特別盛り上がる話題もなく、
どこかしら淡々としたやりとりではあったけれど、
店の中にいた四人はみな会話に耳を傾けていた。

ただ本音を言えば、ツリーだけは話を聞いているのかどうか
よくわからないそぶりをみせていた。
ウェンさんの顔をずっと見つめているかと思えば、
次は僕の眼鏡にやたらと興味を示したり、
カウンター越しの食器棚を眺めていたりしていた。

マスターが淹れてくれたコーヒーは
とても暖かくて、おいしかった。

どれくらい時間がたっただろうか。
自分でも意外なほどたくさんあった
話題もやっと途切れ、
ふとコーヒーのお代を支払わなければ
ならないのではないかと考えた。

「すみません、マスター。
先にお勘定払っときましようか？」
「ん、ああ。いいよいいよ。
出世払いということで。
どうせ君、今の姿ではお金持ってないはずだしね。」
確かに今気づいたのだが、
服装が変わっているのでも前の服の中に
入っていたお金もない。
そのお金もこの店で通用していたかどうか。

ふと、まぶたが重くなる。
「あ、そろそろ『店を出る』方法を教えてもらえませんか？
なんか眠くなってきちゃって...」

僕の質問を聞いてウェンさんとマスターは
顔を見合わせ互いに微笑んだ。

「その状態ならもうすぐ君は
何をせずとも『店を出られる』さ。
ほら、ツリー、ムーンお兄ちゃんに
さよならを言いなさい。」

か細いながらはっきりと
ツリーが僕にさよならと言ってくれた間にも
僕の眠気はひどくなっていく。

僕は三人に別れの挨拶をかわす。

この場で眠ってしまう前に。

もはや立ち上がることもできない。

「どうもみなさんありがとうございました。

楽しかったんでまた来ますね。

マスター、コーヒーおいしかったです。」

「サンキュー。今度は酒でも飲んで行ってよ。」

「ウェンさん、また相談乗ってくださいね。」

「いいよ、今度は自分の家からここに来るといい。

今日より長くここで楽しめるだろう。」

「ツリーも、バイバイ。」

みんなに一通り挨拶ができた後、
自分がまだこの店に来る方法を
知らないことに気づいたが、
もうこれ以上質問する余裕もなく、
僕はその場で深い眠りについた。

目覚めるとそこは

おでんを注文したあの居酒屋だった。

当然と言えば当然なのかもしれない。

今までの出来事が夢だと考えても

違和感のないことだ。

腕時計を見たら12時前だった。

この店に入ったのが10時半前。

夢の中で過ぎた時間はもっと長かった気がするが、

お店でうたた寝するには充分長すぎる時間だった。

「ああ、お客さん、お帰りですか？」

寝る前に水を出してくれた若者が

横から声をかけてくる。

「え、ああ、すみません、

長いこと眠っちゃったみたいで...」

「まあ、それが本来ウチの店でやっていただくことですし。」

「え？」

僕が質問を投げかけようとする前に

その若い店員は僕に小瓶を差し出す。

毎度のことではあるが、

僕がもたもたしているうちに

話が先に進んでいくようで

ちょっとだけ、切ない。

「これ、どうぞお持ち帰りください。

この瓶の中をかいでから寝ると、

寝つきもよくなるし、

お店に再入店できますよ。」

僕は改めて店員の顔を

まじまじとみつめなおす。

再入店一

この人は、動物の顔をした人間だらけの
あの奇妙な店を知っているのだ。

いや、それよりも...

「本当ですか！？」

また、あの店にいけるんですか？

自分の家からでも？」

「はい。においの効果が薄れてきたら

またうちの店に来てもらえば差上げます。

ただ、今晚は一度入店してしまったので

おそらく再入店できるのは明日の晩

からでしょうね。」

あまりにも突拍子のない話が続く。

けれど、再びあの店に行けるのは悪くない。

「ちょっとだけ、ここでかいでみてもいいですか？」

もともと怪しい話ではあるが、どんなにおいがするかは
気になるところではある。

「いいですよ。」

陶器でできた小瓶のふたを開けて

においをかいでみたが、においはしなかった。

「においがしないでしょう？」

この瓶の中身は、

かぐ人のそのときの気持ちによって

においの強さや種類が変わるんです。

においを感じないのは、

あなたの欲求がほぼ満たされているということだと思います。

今晚あなたがかがれたおでんのにおいも、

あなたの感情を反映したにおいの一種です。

また明日の夜、疲れているときにかいでみてください。

信憑性がわからない話かもしれません。

信じていただければ試されなくても

捨てていただいても構いません。」

おでんのことを思い出したが、

もうおでんを欲しいとは思っていなかった。

おなかはバイトのまかないで

もどおり膨れていた。
先程奥で作っていたおでんもなくなっていて、
店長らしき中年の人は
調理場の掃除をしていた。

僕は店員さんの話を信じたかった。
この話を否定すると、自分が見たあの喫茶店を
同様に否定してしまうことになりそうだからだ。

僕は小瓶を受け取り、席をたった。
自分の財布があるのを確認し、
さすがにここでは小瓶のお代を払わなきゃな、
と思っていた矢先、奥で掃除をしている
店長のこの声を聞いた。
「お客さん、勘定は出世払ってことで。」

デジャヴ である。

二人にお礼を言って店を出て、
はっきりと店の場所を確認してから
帰途についた。

自分が物事が同時にできない ということや、
その他もろもろのもやもやしたことは
気がつけば頭の中から消えていた。

ただ、明日の晩が少し楽しみである。
この楽しみがあれば、なんだか学校生活やバイトも
うまくいくような気がなんとなく、する。

たとえ実際はうまくいなくても、
それはそれでいいとも思える。

普段は誰か他人のペースに合わせているだけかもしれないし、
もしかしたらそれすらできてもないかもしれない。
けれど僕自身のペース、マイペースは確かにあるし、

それはすぐには変えることができないのも確かだ。

そのペースを表情や仕草を交えて伝えられる場。

そのペースを違わせる必要もなく受け取ってくれる相手。

それらを得ることができるのは、

僕や僕の持つペースにとって、

とても幸せなことかもしれない。

明日からがなんとなく楽しみである。

自転車のペダルを少し強めに、こいでみた。

今日是最悪の日だ。
もう何も考えたくない。
もう誰も信じられない。
私、馬鹿みたい。

校門を出た後は、
ひたすら今の顔を見られないように
隠しながら走った。
(考えてみれば、そんなことするほうが
却ってよっぽど目立つんだけどね)

どんなことがあっても泣かない、ということが
あるときからそのときまでの
私の信条の一つだった。

小学校のときはけんか相手の男の子が
泣いても私はちっとも泣かなかったし、
中学校のときは女の先輩に「気に入らない」と
目をつけられて、色々いやあ～～～なことをされ続けたときも
涙を見せるどころか冷たい目で睨み付けてやった。

そりゃ我慢するのは大変だけど、
まあ我慢はできる。
そんなものだと思ってた。

でも今回は場合が違った。

その瞬間、頭が真っ白になっちゃって、
何にも考えられなくなっちゃって、
とてもその場にいられなくなっちゃって、
気がつけば涙も勝手にポロポロ流れていた。

ここで最低限の身の回りの人物紹介と
これまでのいきさつを。

増谷先輩は私と同じテニス部で、
私が先輩を意識しだしたのは
先月の学園祭から。

部活仲間と一緒に出店を出して
豚汁を売っているうちに、
先輩の一生懸命さと優しさに
気づいてしまった。

それからというもの、
頭の中から先輩のことが忘れられなかった。

先輩のことを考えてぼお~っとしているときに
後ろから本人に声をかけられて
あわてて「ひゃいっ!？」と裏返った声で
返事をしたこともあったな、うん。

頭がパンパンになった私は部活の親友の美樹に
そのことを話してみた。
「アンタのその押しの強さでいけば
増谷先輩なんてすぐコロリよ！
頑張りなっ。」

自信を失くした人に
その人の心の底から
元気を与えることを言ってあげることができる。
そんなところが美樹の良いところだ。

でもなかなか私も告白などたいそれたこともできず
ただ日々が過ぎていった。

そして今日。

私は部活の練習帰りに
教室に忘れ物をしたことに気づいた。

明日提出の宿題に必要な本なので
取りに戻ろうと学校の下駄箱に向かう。

下駄箱の前にたどり着いたとき、
私は下駄箱の奥の廊下で
実に見慣れた二人の
実に斬新な姿を見つけた。

増谷先輩と美樹が抱き合っていた。

漫画とかでよくあるパターンである。
でも自分が当人になると「あるある！」じゃすまされない。
ってか思考が止まったしね。
思わずその場をUターン。
そして現在に至る。

そう、とにかく今日は最悪な日だってことはわかる。

私の学校の最寄の駅の目の前には
商店街がある。

そして私はいつもその駅から自分の家に帰るし、
その商店街は私、というか学生達の帰り道になっていた。
冬も近く、部活の終わった時間なので
あたりは真っ暗で、商店街に人気はなかった。

部活をやっている他の学生が歩いていても
おかしくはないのだけれど、
今日はたまたま周りに誰もいない。

—結局、忘れ物取りにいけなかったな...
ある程度涙も出しつくし、
私は目的が達成できなかったことを
少し悔やみながら、
商店街をとぼとぼ歩いていた。

さっき自分が見た光景が
頭によぎる度、
必死にそれを追い出そうと
頭を振ってみる。

ああ、また何も考えられなくなりそうだ...。
帰ったら、また思い出しちゃうのかな...。

そう思うと、体はくたくたなのに
家に帰って休みたくなかった。

私はふらっと商店街の途中で小道を曲がった。

細い道の傍らで露天商のおじさんが
灯りをつけて座っていた。
おじさんの表情は暗くてよく見えなかったけれど
かなり厚着のようだ。

いつもなら気味が悪くて引き返していたかもしれない。
でも今日はそんなこと考える気にもならなかったし、
ここをつきついでどっか遠くへ行ってしまうと思った。
商品が並べられている目の前に来たあたりで、
私は声をかけられた。

「お姉ちゃん、今にも消えちまいそうな顔してるねえ。
失恋に効く薬、サービスしてあげようか？」

露天商の適当な冗談が単に凶星だっただけかもしれない。
でも私はその言葉に驚いて
露天商のほうをつい振り向いてしまった。

「お、いい反応だね。
今なら閉店間際の大サービス。
この小瓶をタダであげるよ。
寝る前にこの中身を嗅げば
あら不思議、ぐっすり眠れて
いい夢見るよ。」

正直言って、滅茶苦茶怪しい。
危ないクスリじゃないの？とも思う。

でも、まあタダより安いものもないし、
今の自分の状況を当てられたのもあって、
だまされたと思って「それ、下さい。」
と試してみた。

「毎度っ！
...姉ちゃん。ホント今日はぐっすり
それ飲んで寝ると良いよ。
世の中、自分が今見ていることが
すべてじゃないんだ。
明日になればまた見えるものも
広がるよ、きっと。」

露天商のおっちゃんは、

小瓶を私に手渡しながら
こう言ってくれた。

フードとマフラーの間から
かろうじて見える彼の目は微笑んでいた。

結局私はその後まっすぐ家に帰った。

露天商のおじさんの言葉を聞くと、
さっさと今日みたいな日を
終わらせてしまおうって気になった。

明日増谷先輩と美樹と顔を合わせたときに
どうリアクションしよう、とか
明日の宿題どうしよう、とか余計なことを
今晚ずっと悩むのもいやだし、最悪明日は仮病使って休んじゃえとも思う。

本当にこの小瓶にぐっすり眠らせる効果があるんだったら
とにかく今日はこの中をかいでさっさと寝てしまおう。

きっと明日は今日よりはよっぽどマシな日だ。

「あらお帰り。今日は少し遅かったじゃない。」
「ごめん、今日はちょっと友達と
一緒に外でご飯食べてきちゃった。
母さんに連絡するの忘れてて...風呂だけ入って寝るね。」

精神的に食欲も失くしてしまっていたので
私のためにご飯を用意して待っていていた母親に
適当なウソをついた。

本当は風呂も入らずにそのまま自分の部屋のベッドに
直行したかったけど、下手に詮索されると
私の中の何かが暴発しそうなんで
お風呂だけは行くことにした。

湯船につかると少し体と頭が落ち着いた。
いや、落ち着いた、というよりかは気が抜けた、
という感じかもしれない。
頭がぼんやりしだしたので少しの間
それに逆らわずにいた。

無心でいられた。

でもまたしばらくしてから
学校でのことを思い出しかけたので
私は急いでお風呂から上がった。

母親にいつもより早いおやすみを言って
自分の部屋に戻る。
一応いつもどおりに目覚ましをセットして、
例の小瓶を鞆から取り出す。

薄桃色の陶器の小瓶にはコルクの栓がしてある。
軽く横に振ってみたらシャカシャカと音があった。
栓をはずすと中には容器と同じ薄桃色の
粉が入っているのが見えた。

「本当に人体には無害なのかしら...」
おそるおそる瓶のにおいをかいでみる。

柑橘類のにおい...ゆずか何かの香りがした。
とっても濃い香りだけれど、不思議としつこくはなかった。
気持ちが落ち着く。

「いいにおい...」
ある程度かいだ後、栓を再び閉めて
これは当たりかな、と少し得した気分になりながら、
電気を消してベッドに横になった。

考え事をすることもなく、私の意識は遠いところへ向かう。

私の近くで男性の笑い声が聞こえた。
それに応じて、もう一人がこう尋ねている。
「なんだよムーン、俺の武勇伝のどこに
笑うべき箇所があったよ？」
「ハハ、いやだってレジ袋断った後、
結局両手がふさがって他人にもってもらったんでしょ。」

いくら地球に優しいっていても回りに迷惑かけてちゃねえ。」

こんなどうでもいい話をしているのが、
目の前の犬と猪の顔をした
二人のヒトだというのに気づくには、
そう時間はかからなかった。

私が立っていたのは洋風の喫茶店の入り口。

丸いテーブルと四つの椅子のセットがいくつかあって、その奥にはカウンター席が5，6脚並んでいた。

店員さんはカウンター越しに一人。

客は三人ほど。

カウンター席に一人いて、丸テーブルに二人が向かい合って座っていた。

窓から射す光もあって
昼下がりのどこにでもある
さびれた喫茶店を連想させる。

ただ、客と店員の姿がおかしい。
みんな顔が動物なのである。

でも私は「これは夢だ」となんとなく意識していた。

ちょっと不思議な出来事も
「別にアリだな」と受け入れることができた。

たとえこんなメルヘンな光景の中で
犬顔と猪顔のテーブル席の男二人が
コンビニのレジ袋の話をしていても
「別にアリだな」だし、
たとえ鳩顔の店員がカウンター奥で
何か調理している手前で
その様子をただじい〜っと
眺めている客が
ほんの小さなりす顔の女の子だとしても
「別にアリだな」である。

鳩顔が私に気づき声をかけてくる。

「おっ、新規のお客さんは猫さんだね、
いらっしやい！」

ああ、そして私は猫になっているんだ、と理解した。

少し私に驚いている犬顔と猪顔の前を通り、
私はリスの少女の横に座った。

「ご一緒させてよろしいかしら、お嬢さん？」
女の子は話しかけられて驚いていたが、
オドオドしながらもコクリとうなづいた。

「ハハッ、ここまでためらいもせずに
席についてくれたお客さんも初めてかもね。
でもそういう方に限って早めにここの
数少ないルールを説明しとかなきゃ、
すぐ違反しちゃいそうだなあ。」

私は鳩の店員から
この場では本名を明かしてはならず、
自分で決めた名前を名乗るという
ルールを聞いた。

夢にしちゃあ具体的な決め事だなと思う。
でも今の私はそのことが煩わしかった。
適当に最近読んだ漫画の登場人物の名前を
借りることにした。

「じゃあ私『フレイ』って名乗ることにするわ。
そういうことで、何かおいしい果実酒いただけないかしら？」

夢の中にいるときくらい、好き勝手に振舞いたかった。

高校生の私にとっては現実では
お店で飲酒なんかダメだからこそ、
夢の中でパァ〜っと飲んでやろうと思った。
現実なんか忘れたかった。
一瞬、店員さんがまさに
豆鉄砲をくらったような顔をした。

後ろからちょっと癢にさわるひそひそ声が聞こえる。

「珍しい女性客が来たと思ったら、

なんかおっかなさそうだよな…」

聞こえてるんだよ、イノシシっ！

「いやぁ、まあ、お酒を出してあげるのは別にかまわないけど...

そんな嫌なことでもあったの？」

鳩の店員がこういいながらお酒を用意してくれ始めた。

こうなったらヤケだ。

どうせ夢の中だし、今日あった嫌なことを

全部吐き出してやろう。

「そりゃ飲みたくもなるわよ。

私の親友と好きだった人が

抱き合ってたのを今日目撃しちゃったんだから。」

「ありゃあ〜」

「それは...

きついんだろうなあ...」

後ろから男二人のいかにも

「同情してるよ」的な声が聞こえる。

横のリスちゃんは

いまいちピンときてないようだが、

私の表情から事の大きさを

感じ取ってくれているようだ。

私は店の中のみんなに聞こえるように

これまでのいきさつを話し、

明日からその二人と顔を合わせなければならない

わが身が如何に可哀想かを

熱弁してやった。

鳩さんが話の途中で出してくれた

オレンジキュラソーとかいった

オレンジ色の飲み物も、

グイと一息で飲み干してしまった。

「でも何か勘違いってことはないの？」

例えば親友がつまづいたのを

先輩が支えてただけとか。」
一通り話し終わった後、
後ろから疑問の声が上がったので
私は振り返って
声の主が犬顔のほうだと
確認してから返事した。

「そんなわけじゃない！
しばらくその姿勢が続いていたのを
私はこの目で見たんだからね！」
「は、ハイっ？、スイマセンデシタッ！」
犬顔は身をすくませて返事した。
よく見ると、眼鏡をかけたその犬顔は
気弱そうな表情をしている。
なんか余裕のなさそうなヒトだ。
横の猪顔は相変わらず
「うわ～、この女目血走ってるよ、コエエ。」とか
デリカシーのないことを言ってやがる。

「まあ、その親友さんが意図的に
先輩に抱きついていたら、
かなりキツイ話だね。」
私が頼んだ二杯目を用意しながら、
店員さんは相槌をうつ。

「でもマスター、
ただでさえ女はドロドロしてるんだ、
ましてやこんな突然酒を一気飲みしちゃうような
女子高生に自分の本命を譲るわけには
いかなかったんじゃないのか？」
ニヤニヤしながらこんなことを
言ってくる猪に私はついにカッとなった。

「何よっ！
私とあの子の仲のよさを
知らないからそんなこと言えるんじゃない！」
「じゃあ何だよ、お前は

その親友がお前のこと考えてるのに
先輩と抱き合ってたって言うのか？
それってなんか矛盾してないか？」

確かに。

私が今まで受け入れたくなかった
一つの仮説。

もし親友の美樹が私を
出し抜こうとしていたという仮説が事実なら、
その仮説を私が認めてしまったら、

私は世の中の人を
誰も信じられなくなるかもしれない。

私が返事にためらっていると、
入り口のドアが開く音が聞こえた。

「あっ、ウェンさん。」
「いらっしゃい、今日は遅かったね。」
店に入ってきた人物は熊であった。
その風貌からして
この店内にいる人々とは
歳が大きく離れているようだ。

リスの少女が
熊のおじいさんのほうへ駆け寄る。
「おや、新しいお客さんかね。
はじめまして、ウェンと言うものです、よろしく。」
「あ...どうも、フレイと言います。」

そのウェンという老人の振る舞いが
あまりにも穏やかすぎて、
私のさっきまでの酔いと怒りも
あっさり殺がれてしまった。

「ツリーはフレイさんに挨拶したのかね？」
「してないよ、おやっさん。
てか、ツリーまだ俺にも挨拶してくれてねーし。」
「あっ、そういや僕らもまだしてないや、自己紹介。」
「する間もなくこの子が酒を頼んで
語り始めたからねえ。」

さっきまでの自分の行いを思い出して
なんとなくばつの悪い思いをしていると、
リスの女の子が私のほうへ戻ってきて
小さな声で彼女の名前が
ツリーであることを教えてくれた。

それから犬と猪も順に名前を名乗ってくれた。

「ムーンです、よろしく。」

「ゴールドだ。

紹介遅れて悪かったな。」

「それで、僕のことはマスターと
呼んでくれればいから。」

そうって鳩顔の店員...

もといマスターは二杯目の

お酒をだしてくれた。

次は梅酒かな？

ウェンおじいさんは私との間に

ツリーをはさむ形で

席に着き、こう尋ねてきた。

「さっきまで何か議論していたみたいじゃが、
何を話してたのかな？」

私は同じ内容を

さっきよりも落ち着いた態度で話した。

冷静に思い出して話すと

さっきよりも事の信憑性やリアリティーが
増して聞こえるのは気のせいだろうか。

今度は横で猪...ゴールドがなんとなく

ばつの悪そうな顔をしているように見えた。

これも気のせいだろうか。

話を聞き終わり、ウェンさんは

フムと一言唸ったあとこう言った。

「とにかく、その親友の子には

一度会って話を聞くべきではないかな？

なんらかの誤解があるにしろないにしろ、

それが必要なことに思えるのう。」

それはとても勇気のいることだろう。

そんなこと、正直考えたくない。

「でもまあ、それも『店を出て』帰ってからすればいいことだ。

今はここから『外出して』、散歩でも行ってきたらどうかね。」

そうして言われるがままに
私は店長を除くみんなと『店から外出した』。

店の外は洋風の家が
道以外のすきまを作らず並んでいた。
石畳の道はなだらかな斜面に沿って敷かれていて、
道を下るとしゅっちゅう階段と出くわした。
正面を望むと海と空の境目がくっきりと見える。
どうやらここは海沿いの町のようなのだ。

「驚いたろ？」

俺らの住んでる現実の町とは
別物だよな〜。」

眺めのよい景色と
道の両脇の見慣れない店の看板を
きょろきょろ見回していると、
横からゴールドが声をかけてきた。

「俺らの住む現実の町？」

思わず彼の言葉を声に出す。
でもそれはゴールドに対する返事だけではなかった。

ここは私だけの夢じゃないの？
彼らもみんな自分の「現実」を持つのだろうか。
そういやさっきレジ袋の話してたな…。

「まあ名前と一緒に住んでる場所は言えないけどな。
話す言葉とかノリで、お互いの現実に住む地域くらい
予想できるだろ？」

「ゴールド、突然そんなことを
初めてきたフレイに言っても
頭がついて行かないと思うよ…」

「まあ、君やわしらは皆、同じ立場にいるというわけだ。」

ここが得体のしれない場所であるからこそ、

ウェンさんの一言がおそらく
一番現状を把握しやすい説明だった。

「この存在理由を考えるのもいいけど、
今はここを最大限活用することを
考えるほうがいいよ、きっと。
あ、次の十字路、右に曲がるよ。」

道中、他の動物顔をした人々とすれ違った。
お店の店頭にいるヒトも動物顔だ。
彼らも「現実」をもっているのだろうか。

ムーンたちについて行って到着した場所は、
広場というか、公園だった。
広い敷地に芝生が敷き詰められ、
所々木々が植えてある。
平らなところもあれば、斜面状の場所もある。
走り回れる広さはありそうだ。

そこには海が見渡せられるように
木製のいすが据えられていた。
「このイスに座ってぼお〜っと
景色を眺めるのもいいけど、
その横の芝生に寝転がりながら
眺めるのはもっと気持ちいいよ。」
と、ムーンが薦めてくれる。

「ムーンはなんつーか、
こういう一人で楽しむ方法
を見つけるのうまいよな。
大勢の前だと空気読めなそうだけど。」
「最後のセリフは余計だよ。
...まあ当たってるけど...」

私は素直にそこへ寝転がってみた。
芝生がこそばくて気持ちいい。
正面には空と海しか見えない。

遠くへ来たな、と思う。
なんというか、自分の住むところからだ。
身近な人が信じられなくなったことや、
それに対するショックも、
今は遠い所にあるような気がする。

ふと横を見ると、
ムーンとゴールドが同じように寝転がっていた。

彼らも遠くに何かを置きっぱなしにしているのだろうか。
それも今の間だけに過ぎないのだろうか。

「でも、不思議だよな。」

横で寝転がっているムーンが言う。

「僕やゴールド、それにウェンさんもツリーも
ここの喫茶店や周りの町にくるようになって
まだそんなに日がたってないんだけど、
不思議とお互いに色々話をうちあけてしまうんだ。
現実で起こった不満とか、悩みとかね。」

「だから俺はまだツリーと会話すらしてねえって。」
横のゴールドはふてくされながら
芝生の草花をじっと眺めて座っている
ツリーをにらみつけた。
ツリーの横ではウェンさんが椅子に腰掛けていて、
彼女を眺めて微笑んでいる。

「でも、なんだろう。
ゴールドとツリー、二人ともお互い既に気遣わないというか、
そんなに不快な存在とは思っていないでしょ？
やっぱり、現実の世界のように下手な利害関係がないから
気兼ねない態度で接することができるのかなあ。」

最近、私は人と接するときは警戒をしている、と思う。
口が悪くて気が強いというキャラを周りに見せてる。
確かにそれは自分のキャラだし、
今までの人付き合いから自然と出来上がったものだ。

でも流石に親友の美樹には警戒を解いてた。
自分の人には見せられないような
弱い面も美樹には見せてた。
それは（今にしてみれば多分、としか言えないけど）
向こうも同じだったんだと思う。

でも今、私はそのことを後悔している。

弱い面を美樹に見せちゃった分、
それが仇となっているような気がするからだ。
それが自分のショックを大きくしているような気がするからだ。

そう、美樹が自分に近いところにいた分、
今のショックは大きい。

そんな現実と比べてこの場所は気が緩む。
遠い所なのに、いや、遠い所だからこそ
自分の弱みも見せられる気がする。

夢の中だから？
最初はそんな気持ちで
悩みを店内でぶちまけた。
でも今はその理由とはまた違う気がする。

空と海の間らへんを見つめながら
そんなことを考えていると、
ムーンが再び声をかけてきた。
「ああ、なんか、ごめんね。フレイ。
こっちが一方的にしゃべっちゃって。」
「え？あ、そんなの、気にしてないよ。」
というか、別に謝らなくてもいいだろう。
でもこれはこのムーンという男の、
礼儀とかそんなのからくるものじゃあなくて、
素直な気持ちからでた
「ごめんね」のような気がした。

「いや、なんかすごい不機嫌そうな顔してたから。」
「ウソ？私が？」
「え、ああ、そんなことなかった？
元々そう見えるのかな...」

ん？
なんだかひっかかるセリフだ。
それって...

「私の顔、そんな恐く見えるのかしら？

失礼なこと言ってくるわね～」

「え！？ゴメン、そんなつもりじゃあ...」

「ハハッ、ムーンも言うじゃねーか！」

私は起き上がり、腕を振り上げて

ムーンを殴るフリをする。

とっさにムーンも起き上がり、

私から逃げるような素振りを見せる。

ゴルドは腹を抱えて笑い、

ツリーは私達を見て何が起こったのかと

不思議そうに見つめている。

ウェンさんは相変わらず私達を見て

微笑んでいた。

どれくらい時間が経ったかは
よくわからなかったけど、
しばらくその公園でのんびりした後
私たちはこの街を散歩することに決めた。

「あの鳩のマスターの喫茶店では
お金はとらないみたいだけど、
他のお店ではこの世界の通貨で
物を買うみたいだよ。」

私が小物屋さんに並んでいる
きれいな色をした貝殻のペンダントを
触らせてもらっているときに、
ムーンはこう教えてくれた。

「へえ、じゃあそのお金は
どうやって手に入るのかしら？」

「そりゃ現実と一緒にだ。」

働かなきゃ金儲けはできねえよ。」

横で謎の動物の角らしきものを
いじっているゴールドが答える。

「日給単位でそこらじゅうのお店や
農場なんかで働くことができんだ。
近くの森や海で狩りや漁をすることもできっけど、
それには各組合の許可が必要なんだってよ。」

妙にリアルな話である。

とても夢の中の話とは思えない。

「でも私学校で禁止されてて、
現実でもバイトとかしたことないのよね...」

「それは心配せんでよいじゃろう。」

わしみたいな体力のない老いぼれでも
本屋の店子はさせてもらえたし、
ツリーも小遣い稼ぎに
ミカンの収穫のお手伝いを

立派に果たしておったからな。」
と手提げ袋を片手にウェンさんが言う。
向かいの文房具店で袋ごと
原稿用紙を買ったらしい。
夢の中で物を書くのか？と
少しウェンさんの気持ちがわからなくなった。

「ただ、働く前に店の人にも注意されるけど、
『特に僕達は』 仕事中に眠っちゃあダメだよ。
その日一日サボっちゃうことになるからね。
そしたら日雇いでもお店の人に迷惑かけちゃうから。」
セリフの節々にピンとこない表現があった。
仕事中に寝ないということも
普通でしょ？とか思ってしまう。

「...まあ今日は見て歩くだけにするわ。
それだけでも十分面白いし。」
私達はそれからもしばらく「外出」し続けた。

街中を歩き回っているうちに、
今までずっと真上にあっただと思っていた太陽が
いつのまにか水平線のすぐ真上にまで
降りてきていることに気づいた。

「そろそろこの町も暗くなる。
みんな、喫茶店に帰ろうじゃないか。」

階段を上る途中で
夕焼けに見とれていた私は、
ウェンさんの一言でこれからすべきことを知る。
同じく日の出に見とれていたムーンたちも
少し物惜しそうに喫茶店の方へ向かいだす。

「別に喫茶店からじゃなくても
『店を出る』ことはできるんだけど、
やっぱりお店で解散、っていう方が
みんな気持ちがすっきりすると考えているんだ。」
「そーそー。
街中で突然消えちまうと
色々やり残した気分になりそうだしな。」

「店を出る」といえば確か
この世界から現実へと帰ることだ。
私が「店を出る」と、
この世界から猫顔の私は
その場から突然いなくなる
ということだろうか。
まあ、私が現実へ帰るのだから
当たり前の話であるが。

ゴルドらの話す内容から、
どうやら「店を出る」ことは自分の望み通りの
タイミングではできないようだ。

「お帰り。

どうだい、街中の散歩は楽しかったかい？」

喫茶店ではマスターが迎えてくれた。

お客は私達五人以外は

相変わらずいないようだ。

「ええ。

見るものがみんな珍しくて、

面白かったわ。

もうはしゃぎすぎてヘトヘト。」

「そりゃあよかった。

常連の皆さんもお疲れかい？」

「まあな。後半はずっと歩き回ってたしな。

もう十分だ。」

「買うものも買えたしのう。

今日のここでの行いには

後悔はないな。」

マスターのセリフに各々が返事している中、

ツリーはテーブル席に座り、

そのまま突っ伏してしまった。

「おやおや、

お嬢ちゃんは早くもお帰りのようだね。」

マスターの言葉で、ツリーは少しだけ

顔をこちらにむけた。

「また明日じゃな、ツリー。」

ウェンさんはそう言ってツリーに手を振る。

ツリーはそれに対して返事をすることもなく

瞼をとじた。

彼女の姿は徐々に透けていき

やがて、消えてしまった。

「さーて、俺もぼちぼち「店を出る」ころかな？」

今日は仕事も早いしな。

じゃあみんな、またな。」

ゴルドはそうやって別のテーブル席につき、
先程のツリーと同じように机に突っ伏した。

ここで私は気づく。
どうやらこの世界で眠ることが
『店を出る』方法らしい。
私自身も眠気を感じて、
カウンター席へと向かう。

カウンターではウェンさんが
マスターに手持ちの袋を預けていた。
「じゃあこれ、宜しくお願いします。」
「了解です。必要になったらいつでも
申し付けてくださいね。」
さっきウェンさんが買った
原稿用紙や筆記用具のようだ。
どうやらここでの所有物は
マスターに預けることができるらしい。

「今日は僕達みんな、現実では早起きだろうね。」
私の席の後ろから声をかけてくるのは
ムーンである。

「じゃあ、親友の子に宜しくね。」

忘れてた。
美樹と先輩のこと。

一その日、私は目覚まし時計が鳴る
少し前に目覚めた。

ベッドの横の机には
昨晚露天商に貰った小瓶が置いてある。

夢の内容ははっきりと覚えている。
まるで昨日から二日分経ったようだ。

「あら、今日は早いじゃないの。」
「まあ昨日寝るのも早かったからね。」
私を見て特に心配する様子もない母親。
そう、きっと私はいつも通りなのだ。

私はいつもより一本早い電車にのって、
いつも通りの道を通って学校へ向かう。

美樹とは普段から登校する時刻は違うし、
クラスも違うので実際に会うことになるのは
放課後の部活の時間だろう。

その来るべき時に対して私は
何の心の準備もせずに
学校での半日を後悔なく過ごした。

私が本を忘れて
宿題をできなかった授業でも、
堂々と「すみません忘れました」と
言えば「次回までにやってくるように」
と返ってきただけで事なきをえた。

このまま私の学校での時間は
放課後まで淡々と過ぎていく予定だった。

が。

昼休み、手を洗いに廊下に出ると
増谷先輩が正面から現れた。

思わぬ場所と時間での遭遇だったけど、
私は先輩の目を見続けることができた。

先輩は私の方へ向かって歩いてくる。
私に会いに来たようだ。

「ちょっと、いいかな。」
申し訳なさそうな先輩のセリフ。

私は人気のないグランド脇まで誘われた。

このシチュエーション、愛の告白を期待するには
十分であろう。

残念なことに先輩の表情は愛ではない
別の物を告白してきそうな
申し訳ないものであったし、
私はその表情からこれから良いことが
おきるとは到底想像できなかった。

それでも私はどっしりと構えられた。
落ち着いて、先輩の用件を聞く準備ができていた。

「まず、これだけ先に言っておくよ。」
先輩が口を開いた。

「ごめんね、火田さん。」

それは、私に対する謝罪の言葉だった。